

偽りの自己像： *Jane Eyre* における自伝的語り

奥村真紀

Virginia Woolf は、Charlotte Brontë の *Jane Eyre: An Autobiography* を評して、“When Charlotte wrote she said with eloquence and splendour and passion ‘I love,’ ‘I hate,’ ‘I suffer.’” (71) と述べている。実際、最終章の冒頭の有名な宣言、“Reader, I married him.”¹ が端的に表しているように、この小説においては一人称の語り手が読者に対して、非常に強烈に自己主張をしている。2作目の小説である *Jane Eyre* を書くにあたって作者は、男性の一人称の語り手を使って失敗と断じられた第1作 *The Professor* とは異なる女性の一人称の語り手を選び、さらに副題が示すように、その語り手が自分の物語を語る自伝という形を取った。つまりこの作品において Jane は主人公であると同時に語り手でもあり、クロノジカルに生きている主人公の人生を、回顧的に語っている。自伝的語りとは、過去を辿る自己のアイデンティティの探求であり、読者の存在を常に念頭に置き、われわれに呼びかける語り手 Jane² に特徴的なのは、語ることで自分の人生を再構築しているという強い意識である。しかし、この自己主張の強い語り手が描き出す主人公としての Jane は、自己抑制が強く、常に物陰に退いて人の話を聞く人物であり、読者はそのギャップを感じざるを得ない。つまり作者は同一人物であるはずの語り手と主人公の間に距離を作りだし、そのずれを読者に示しているのである。本論文では、語り手がどのように自分の人生を再構築しているかを追いながら、その自己主張の強さが何に起因するのかを考察してみたい。

Sandra Gilbert と Susan Gubar を始め、何人もの批評家が *Jane Eyre* を

“a distinctively female *Bildungsroman*”³と定義しているが、実際、この小説のプロットは主人公 Jane が成長し、自らのアイデンティティを獲得していく過程を描いている。小説の冒頭で、主人公 Jane はよるべない孤児であり、家の中で抑圧され疎外される存在として舞台に出てくる。彼女はいつこの John Reed に “you are a dependant” (11) と呼ばれて激しく反発するが、彼女の目指すアイデンティティは、社会的なレベルでは、小説の最後で誇らかに宣言される “I am an independent woman now” (458) になることであることは明らかである。同時に精神的なレベルでは、冒頭での状況、“I was a discord in Gateshead Hall.” (16) が、小説の最後で描かれる “perfect concord is the result.” (475) という Rochester との結婚生活と対照される。つまり、主人公 Jane が社会的アイデンティティと、精神的な帰属意識の双方を得るというゴールに向かって成長していくプロセスが、語り手によって語られていくのである。

Annette Tromly は、この小説が語り手によって “a five-act play” (47) に変えられていると論じているが、この劇化は語り手自身が意識している。例えば、第2章は “unconsciousness closed the scene” (18) という言葉で閉じられ、第11章は “A new chapter in a novel is something like a new scene in a play; and when I draw up the curtain this time, reader, you must fancy you see a room in the George Inn at Millcote” (97) という言葉で始まる。語り手は自分の人生を劇のように分けることによって、主人公の成長のプロセスをわかりやすく、ゴールに向かってまっすぐに進んでいるように示すことに成功している。つまり Jane は何も持たない根無し草の状態から、それぞれの段階で一つずつ社会的な、外側からのアイデンティティを得ていくのである。孤児として Gateshead を出発した Jane は、Lowood では友人と教育を、Thornfield では愛を、Moor House では財産と血縁を、最後の Ferndean では家庭を手に入れる。それは、社会からも家庭からも疎外されていた Gateshead の生活から、徐々に他人との関係を通じて帰属意

識を得、自分を“heterogenous” (16) な異端者から一つの社会の中心人物に変えていく、段階をふんだ精神的な成長過程の描写でもある。さらにそれは Gateshead で、他者である Mrs. Reed や Bessie の言葉によって自分を規定されていた無力な子供の主人公から、自分自身の声で自分を語る語り手への成長でもあるのである。

語り手は小説の最初の段階で、子供時代の主人公の視点に修正を加えている。例えば Gateshead の赤い部屋の場面で、主人公の感じる激的な苦しみと並置して、幼い自分には見えなかった様々な状況が成長した語り手によって冷静に描かれる。

Why could I never please? Why was it useless to try to win any one's favor? . . . I dared commit no fault: I strove to fulfil every duty; and I was termed naughty and tiresome, sullen and sneaking, from morning to noon, and from noon to night. . . .

[N]ow, at the distance of—I will not say how many years, I see it clearly.

I was a discord in Gateshead Hall. . . . They were not bound to regard with affection a thing that could not sympathize with one amongst them. . . . (15-16)

語り手は、幼い自分が感じたことを描写した後、その主観的な苦悩に対して客観的な修正を加えるのだが、そうすることで自分の過去と現在の間に距離を置き、自分の成長を印象づけている。小説の冒頭から、語り手は自分の存在を読者に感じさせ、さらに自己批判を行うことによって、自分の語り手としての信頼性や中立度を読者に印象づけようとしているのである。

同時に、語り手が自分の現在の視点だけを提示するのではなく、主観的な子供時代の感情をそのまま描写していることも注目し得る。例えば Lowood への旅程を、Bessie は“Fifty miles” (43) と言うのだが、幼い

Jane にとってはそれは “over hundreds of miles” (43) に感じられる。Mr. Brocklehurst の出現を “a black pillar!” (32) と描写し、Lowood の本当は 80 人に満たない生徒の数を “countless” (45) と感じる Jane の主観的なものの見方は、赤い部屋で脅えきった自分自身を “one of the tiny phantoms, half fairy, half imp” (15) と見るところで頂点に達する。語り手が、このような鋭い感受性を持った子供の視点を客観的な説明と同時に提示することで、読者は幼い Jane にあわれみと共感を感じるのである。主人公 Jane は次のような瞬間を経験する。 “[F]or the first time, glancing behind, on each side, and before it, it [Jane’s mind] saw all round an unfathomed gulf: it felt the one point where it stood—the present; and the rest was formless cloud and vacant depth.” (82) 未来を知らず、現在を一步ずつ進んでいくしかない主人公は常に現在という瞬間に生き、全てを知っているはずの語り手はしばしば視点を主人公の現在に同一化させることで、読者に主人公との一体感を感じさせ、作品世界の中に引き込むことに成功している。しかし、語り手が自己批判を行い、主人公との間に距離をとって客観的な描写をつけ加えるのは、主に Gateshead と Lowood 時代、つまり子供時代に対してであることは興味深い。Gateshead で語り手は主人公の状況に解釈をつけ加え、館の女主人を “Mrs. Reed” と呼ぶことで主人公や主人公を取り巻く状況に距離を置いている。Lowood での経験も、語り手は直接子供の視点で語る以上に、物語に距離をとって読者に向けて語る。例えば Helen の病気をクロノロジカルに子供の視点で語るかわりに、語り手はまず Lowood に到来した春と蔓延する病気の中で自分が人生を楽しんでいることを描写し、それに続いて、 “And where, meantime, was Helen Burns? Why did I not spend these sweet days of liberty with her? Had I forgotten her; or was I so worthless as to have grown tired of her pure society? . . . Helen was ill at present.” (81) と客観的な視点で語るのである。

Gateshead と Lowood のシーンを終えた Jane は、第 10 章で 18 歳になっ

て再登場する。激情的な10歳のJaneと、落ち着いた教師である18歳のJaneの間にはすでにギャップがあるのだが、同時に語り手のヒロインとの距離の取り方も変化している。子供時代の自分を客観的に描写し、説明を加えていた語り手は、大人になったヒロインとは意識的に視点を同一化し、そのような距離をあまり感じさせない。10歳と18歳のJaneの間のギャップは語り手がその8年間で意図的に飛ばしていることから生じてくるように思われる。子供のJaneは非常に感情的であり、神の存在に疑問を抱いている。それはHelen Burnsとの対比で際立っているが、あきらめと運命への忍従をもって永遠の生である死を待ち受けるHelenに対して、Janeは彼女の代わりに不当な仕打ちに怒り、最後まで“Where is that region [where Helen believes to go after death]? Does it exist?” (85) と、神の救いや天国の存在に懐疑的である。この懐疑的、感情的なJaneと、信仰を持ち、自己抑制の強い18歳のJaneとの間には、何らかの変化の瞬間があるはずであるが、それについては語り手は何も語らない⁴というのも実際には語れるような変化は起こっていないからである。18歳の自分を評して、語り手は次のように書いている。“I had given in allegiance to duty and order; I was quiet; I believed I was content: to the eyes of others, usually even to my own, I *appeared* a disciplined and subdued character” (88; 斜体は引用者) つまり、子供時代を終えた自己抑制の強いJaneは実はそう見える、あるいは意識的にそう見せているだけであり、本性は感情的なままなのである。

第10章の冒頭で、語り手は自分の物語を次のように語っている。

Hitherto I have recorded in detail the events of my insignificant existence: to the first ten years of my life, I have given almost as many chapters. But this is not to be a regular autobiography: I am only bound to invoke memory where I know her responses will possess some degree of interest: therefore I now pass a space of eight years

almost in silence. (86)

ここで語り手は“the first ten years of my life”を今まで描写してきたと書いているが、実際は Jane は舞台に出てきた時にはすでにもう 10 歳であり、語り手自身それを“I was but ten” (10) と書いているのである。語り手はここで語りの誇張を行っているのであって、実際に語り手が書いてきた部分はほんの何か月かの物語に過ぎない。つまりこの時点ですでに様々な取捨選択は行われ、小説には語り手の判断によって絞り込まれたエピソードだけが描かれているのだ。語り手は、自分で明言しているように、語りの操作を行っている。自分にとって興味のあること、つまり、語りたこと、語れること、語らなくてはならないと感じていることだけを強制的に語っているということ、ここで語り手は認めているのである。読者は語り手が自己検閲と、語る事物の取捨選択を行っていることを忘れてはならない。語り手が語りたことだけを語ることに、主人公が見せかけの控えめな自己を作ることは、本質的に近い行為だと言うことができるだろう。主人公は語り手の声を通してのみ描写されるのであり、また、主人公自身が成長してプロットの終わりで語り手となって再度自分の物語を回顧するのだから。本質的に、Jane は変化していないのである。

Jane Eyre の語り手の特徴として、自己主張の強さと、読者に対する呼びかけの多さが上げられるが、それは自分の物語に対する不安から、自己正当化をはかり、読者の共感と承認を得るためだと考えられる。それでは、*Jane Eyre* が自己正当化の必要を感じる物語とはいったいどのようなものであろうか。また、何故自分を控えめな自己として描き出すのか。アイデンティティを求める旅、Gateshead から Ferndean まで、本当にプロットを動かしているのは、*Jane Eyre* の停滞を嫌い、動きを求める志向である。Gilbert と Gubar はこの小説を“a story of enclosure and escape” (339) と定義しているが、実際 Jane は常に落ち着いた場所からの変化を求めている。

語り手はそれを次のように叙述している。

I longed for a power of vision which might overpass that limit; which might reach the busy world, towns, regions full of life I had heard of but never seen; that then I desired more of practical experience than I possessed. . . I believed in the existence of other and more vivid kinds of goodness, and what I believed in I wished to behold.

Who blames me? Many no doubt; and I shall be called discontented. I could not help it: the restlessness was in my nature; it agitated me to pain sometimes. . . .

It is in vain to say human beings ought to be satisfied with tranquillity: they must have action; and they will make it if they cannot find it. (114)

語り手がかつても熱心に語っているのは自分が動かなくてはならないというその強い志向である。後に St. John Rivers と出会う時、彼は Jane のその傾向を見抜いて “in your nature is an alloy as detrimental to repose as that in mine; though of a different kind” (373) と言う。彼らの会話はさらに続いている。

“I read it in your eye: it is not of that description which promises the maintenance of an even tenor in life.”

“I am not ambitious.”

He started at the word ‘ambitious.’ He repeated, “No. What made you think of ambition? Who is ambitious? I know I am: but how did you find it out?”

“I was speaking of myself.” (375)

St. John がはっきり理解しているように、Jane と St. John の類似点はその変化を求める志向であり、それは“ambition”という言葉で言い換えられる。控えめに見える Jane は、否定してはいるが、本当は野心家であり、まだ見ぬ世界を見る「視力」を渴望している。しかし男性である St. John とは異なり、女性である Jane はその野心を一人でかなえることはできない。St. John が妻としてインドに同行することを望む時、彼女はインドという未知の国に行くこと自体には一種の魅力を感じていながら、彼の“I want a wife: the sole helpmeet I can influence efficiently in life, and retain absolutely till death” (428) という言葉、彼女の存在を St. John の従属物にしてしまうその言葉に対して反発し、拒絶する。しかし彼女は一人でその未知の国に行くことはできない。St. John が言うように、19歳の少女は誰かに連れて行ってもらえないのである。だから Jane は自分を犠牲にするよりも、その野心を自己実現という形に昇華させるのである。Jane は言う。“With you, I would have ventured much; because I admire, confide in, and, as a sister, I love you: but I am convinced that, go when and with whom I would, I should not live long in that climate. . . . God did not give me my life to throw away.” (436) Jane の変化を求める志向は、ゆえに自分の生を大切に、自分が自分であることを確認する過程と重なるのである。

実際、この小説において主人公 Jane は、何度もくりかえし“I am Jane Eyre.”と断言している。Terry Eagleton は“For someone as socially isolated as Jane, the self is all one has. . . . ‘Self-possession’ comes to assume a meaning deeper than the coolly impenetrable composure.” (24) と指摘しているが、まさに Jane にとっては、自分が自分であることを確認し主張することが絶対的に必要なのである。⁵最初から彼女は“a dependant”であり、個人としては何物でもないというアイデンティティの危機を経験し、それを得られる場所を求めて旅を続けているのだから。Jane Eyre は決して自分を Jane Rochester と呼ぶことはない。Rochester との結婚前夜、彼女

は言う。“not I, but one Jane Rochester, a person whom as yet I knew not. . . . Mrs. Rochester! She did not exist: she would not be born till tomorrow, . . . and I would wait to be assured she had come into the world alive, before I assigned her all that property.” (288) Margaret Homans は、Mrs. Rochester が Jane の “unborn child” であり、母である Jane のアイデンティティをなくしてしまう存在であるので、小説の中で拒絶されると論じているが、より大切なのは、Jane Eyre を Jane Rochester と名付けることが Rochester にとって、彼女を所有することを意味するということである。⁶それは Rochester がその存在を、またその所有を拒絶しようとしている本当の妻 Bertha を決して Bertha Rochester という名前で呼ばないことから明らかである。Jane は Rochester との会話でそれを感じ取っている。

“It is Jane Eyre, sir.”

“Soon to be Jane Rochester,” he added: “in four weeks, Janet; not a day more. Do you hear that?”

I did; and I could not quite comprehend it: it made me giddy. The feeling, the announcement sent through me, was something stronger than was consistent with joy—something that smote and stunned: it was, I think, almost fear.

“You blushed, and now you are white, Jane: what is that for?”

“Because you gave me a new name—Jane Rochester.” (271)

Jane Eyre は Jane Eyre であり、小説の最後で実際に Rochester と結婚しても、決して自分を Jane Rochester と呼ぶことはない。彼女の自伝のタイトルも *Jane Eyre* のままなのである。名前が変わることは大きなアイデンティティの危機を意味する。Jane は Rochester に St. John と同じ、自分の存在を無にする権威を感じ、だからこそ Rochester のもとを去るのである。

しかし語り手は、Thornfield を去る自分の決意は神の導きであるとし、守るべき法律や道徳を口にする。“I will keep the law given by God; sanctioned by man.” (334) “God must have led me on.” (339) しかし、それでは何故 Bertha の死を知らずして Jane が Rochester のもとに戻ってくるかが十分に説明できない。実際 Jane が去っていく時に Rochester に言う言葉は、彼女自身ではなく、信仰にすがり、この世の享楽をあきらめきった Helen Burns の言葉である。“Do as I do: trust in God and yourself. Believe in heaven. Hope to meet again there. . . . We were born to strive and endure.” (333-334) だが、実際には Jane は “I was no Helen Burns” (68) と明言し、Helen を拒絶したはずである。その上、このように人間的な愛を拒絶して神を選んだ Jane が次に神のしもべである St. John に会うことは必然であるが、彼女は Helen なら受け入れたであろう彼の計画を受け入れることはない。ゆえに語り手が主張する神の導きというのは、Jane が Thornfield を去る理由としては信用できない。実は、“I care for myself. The more solitary, the more friendless, the more unsustained I am, the more I will respect myself.” (334) と宣言しているように、Jane は自分自身であり続けるために Thornfield を去り、次の段階で財産と血縁を得て、自分に足りない本当の家庭を見いだすために最後に彼のもとに戻ってくるのだ。実際、Rochester との婚約期間、Jane が一番悩むのは経済的な依存である。これは小説の冒頭で John Reed に指摘された “a dependant” の状態に変わらない。彼女はこれに屈辱を感じ、自分のものになるだろう財産のことを思い出す。“[T]he more he bought me, the more my cheek burned with a sense of annoyance and degradation. . . . ‘It would, indeed, be a relief,’ I thought, ‘if I had ever so small an independency. . . if I had but a prospect of one day bringing Mr. Rochester an accession of fortune, I could better endure to be kept by him now.’” (281-2) ゆえに、その遺産を得て “independent” になった Jane は、安心して Rochester のもとに戻って

ることができるのである。

小説の最後で、Jane は愛情深く献身的な妻となり、男の子の母となる。語り手は “My Edward and I, then, are happy” (476) とその幸せな結末を強調する。実際、Elaine Showalter が指摘するように、ヴィクトリア朝時代、女性として正常だと見なされるためには、妻となり、母となることが必要だったことを考えると、まさに Jane は “heroines—both professional role-models and fictional ideals—who could combine strength and intelligence with feminine tenderness, tact, and domestic expertise” (100) の一人である。Jane Eyre の社会的アイデンティティも、帰属意識も、小説の最後では完璧なものとなる。しかし、その幸福の中で、Jane は自伝を書くことによって自分の人生をふり返らずにいられない。妻であり母であることが女性の自己としての存在を無にすることなら、よりいっそう Jane は自分の存在を確認する必要がある。最終的なアイデンティティを社会によって認められ、変化できなくなってしまった Jane は、その不安を昇華するために、自分の得たアイデンティティの正しさを自伝という形で書くことによって確認することしかできない。Annette Tromly が指摘するように、彼女は自伝を書くことによって、自分の動かない現在を “revitalize” しようとするのである。⁷ 語り手は自分の得たゴールが正しいものであることを確認するために、意識的にその「幸せな」結末に向かうために必要なエピソードだけを選んで語っているので、小説はまっすぐにゴールに向かって進んでいくように語られている。例えば、変化できない人物である Mrs. Reed と対峙することで主人公の成長を示すために、小説の半ばで語り手は主人公を出発地である Gateshead に帰らせ、自分の変化を強調している。さらに、読者からの共感と承認を得るために、語り手は登場人物を分かりやすく善悪の二項対立で描写する。Jane の語りは自分の成長を示すために自分の過去を再構築するという目的意識が強く、そのための情報操作をも辞さないのだ。⁸

Jane Eyre は語り手が描き出すような、控えめでおとなしいだけの人物で

はない。彼女は例えば Rochester との決別の場面においても、かなり策略的である。激した Rochester と向かい合って、Jane は “The crisis was perilous; but not without its charm” (319) とその状況を楽しんでさえいて、計算して涙を流すのである。 “If the flood [of tears] annoyed him, so much the better. So I gave way, and cried heartily.” (319) それは彼女が実は他者からの称賛や注目を欲し、外見を気にすることにつながる。例えば、Gateshead でのけ者にされている彼女は “To speak truth, I had not the least wish to go into company, for in company I was very rarely noticed” (29) と語り、注目されない状態で Gateshead の人々と一緒にいることがいやだと言っているのだ。彼女が注目されない理由は、自分が “plain” であるからだと彼女は思っている。彼女は冒頭から “my physical inferiority” (7) に言及しているが、その劣等感は召使たちの評価によって強められる。 “‘Yes,’ responded Abbot, ‘if she were a nice, pretty child, one might compassionate her forlornness; but one really cannot care for such a little toad as that.’ ‘Not a great deal, to be sure,’ agreed Bessie.” (27) 語り手は実際もっとはつきりとその願望を書いてもいる。

I sometimes regretted that I was not handsomer: I sometimes wished to have rosy cheeks, a straight nose, and small cherry mouth; I desired to be tall, stately, and finely developed in figure; I felt it a misfortune that I was so little, so pale, and had features so irregular and so marked. And why had I these aspirations and these regrets? It would be difficult to say: I could not then distinctly say it to myself; yet I had a reason, and a logical, natural reason too. (103)

自分の得たアイデンティティの正しさを主張する語り手は、もし自分が美しくなかったなら違うアイデンティティを得られたのではないだろうかと考え、現状に満足していないようにさえ読みとれる。さらに言うならば、その劣等感

ゆえに、彼女の描く悪役は全て美しいのではないだろうか。

このような語りの操作は、頻繁な呼びかけを通して、読者の共感を得るためになされ、それに成功している。⁹ 読者は *Jane* の物語に引き込まれ、小説の内部から彼女と同じ道を通して最後の幸せな結末に至るのである。しかし、“this is not to be a regular autobiography” (86) と明言する語り手は、実は自己抑制の強い主人公と、ロマンティックな愛の物語を捏造し、自分の自己主張を読者に対して正当化しようとしているのである。なぜなら *Jane Eyre* が行う、女性の自己主張は社会的にみて「女らしくない」行為であるからだ。それは例えば、Elizabeth Rigby の *Jane Eyre* への書評にみられる激しい嫌悪感に明らかである。“Jane Eyre is proud, and therefore she is ungrateful too. . . . The doctrine of humility is not more foreign to her mind than it is repudiated by her heart.” (451) Gilbert と Gubar が指摘するように、ヴィクトリア朝女性作家の小説を書くことに対する不安は、自己主張することで「女性」ではなく“a monster or freak” (34) と見なされることであった。小説の最後で妻であり、母であるという社会的アイデンティティを確立した *Jane* は、その閉塞感から自分の声によるアイデンティティの確認を必要とする。語りを奪われた *Jane* は語れない *Bertha* となるしかないからである。¹⁰ しかし、その自己主張は両刃の剣である。自分が自分であるというアイデンティティの確認をすればするほど、その自己主張は女らしくない行為となり、社会的アイデンティティは危機にさらされる。ゆえに語り手は、小説の中の自分を徹底的に控えめな存在として描き、読者を小説世界の中に引き込むことで、共感と承認を得ようとするのである。小説の結末で、彼女はヴィクトリア朝の「家庭の天使」さながらの献身的な妻となり、幸せな生活を送っている。しかし、彼女の「幸せ」は、“blest beyond what language can express” (475) と表現され、語り手にとって語れない幸せを与える結婚生活の中で、彼女は密かに自伝を書くことで自分の人生を確かめているのだ。

語り手の自己主張に対する切望と不安は、同時に女性作家 Brontë の葛藤でもある。Marcus が指摘するように、当時作家であるということは自己広告と密接に結びついていた (213)。これは当然自己主張行為に帰結し、女性に求められた控えめさと矛盾する。Brontë が女性作家として評価されるのを拒み続けたことはよく知られているが、彼女はその偏見を避けるために Currer Bell という筆名を用いた。匿名での出版を選んだ Jane Austen と違って、Brontë は意識的に筆名を選択し、アイデンティティを偽装することで男性中心社会の中での地位を確立しようとしたのである。これは、語り手が自分の自己主張を控えめな主人公という自己像で覆い隠し、読者に呼びかけることで共感を求めるという行為と重なる。読者に対する呼びかけは、Brontë 自身のものでもあるからだ。自分が落ち着くべき境界を超えた、遙かなるヴィジョンを求める主人公 Jane の「視力」は、ここで作者 Brontë 自身の作家としての「視力」への渴望と重なり、自己正当化の必要を感じるその不安は、語り手と作者に共通の、語るための動機となるのである。Brontë もまた、女性としての限界を超えたところに作家としての自らのアイデンティティを見だし、その否定されるべき自らの“ambition”を、読者の共感によって認知されることを渴望しているのだから。

Jane Eyre の第一版では、Currer Bell は *Jane Eyre* の語る自伝の編者としてタイトルページに名前を載せている。つまりそれは、Currer Bell という男性の検閲を経て承認された、*Jane Eyre* という女性の物語という形を取るのである。意識的な筆名の選択は二重の効果を持っている。Brontë は Jane の自己主張を男性の検閲でもう一度偽装させることで、自伝作者である *Jane Eyre* の女性としてのアイデンティティを守ると同時に、女性作家である自らのアイデンティティをも隠蔽する。読者はそのような男性による検閲の偽装の裏側に、作者の葛藤と不安を解消しようとする真摯な試みを感じる。*Jane Eyre* における語りの操作は、語り手の強い自己主張の必要性と、それに伴う不安を押し隠す自己防衛の行為である。それは作者 Brontë の女

性作家としての葛藤と、作家であることに対する自己正当化への渴望と重なり、読者に圧倒的な共感をもって自分の物語を承認することを訴えかけ続けているのである。

注

- 1 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*. Ed. Margaret Smith. (Oxford: Oxford UP, 1993) 473. 以後、*Jane Eyre* からの引用はこの版を使用し、括弧内に頁数を示す。
- 2 Sylvère Monod によると、語り手 Jane は実に 30 回も読者に直接呼びかけている。
- 3 Gilbert and Gubar, 339. 例えば Maggie Berg は Jane を “a nomad—an orphan with no roots and little knowledge of her beginnings” と定義づけ、この小説を “archetypically Victorian search for identity” (33) と見なしている。
- 4 Jane の変化について描写がないことに何人かの批評家も注目しているが、語りを 2 つに分けて、彼女の変化を論じているものがほとんどである。Barbara Hardy は Jane の感情と信仰の 2 つの段階の間には “a gap” (65) があるが、作者は conversion よりも Jane の成長を書きたかったと述べている。Peter Dale は “conversion” の瞬間をわざと消すことによって、読者の期待を裏切り、“indeterminacy” の効果を出していると論じている。私が注目するのは、Jane が変化したように見せかけているだけで、実は変化していないという点である。
- 5 “I am Jane Eyre” という頻繁な確認について、Jane の自我の主張は、彼女の出す家庭教師の広告に象徴的に現れている。彼女はその広告の署名として、イニシャル “J. E.” を使うのであるが、これは Jane が勉強する言語であるフランス語では「私」をあらわしている (Marcus, 211)。Jane Eyre が後に使う Jane Elliott という偽名でもそのイニシャルは変わらない (Hennelly, Jr., 703)。
- 6 Homans, 91. Erich Fromm は、男性の「名付ける」という行為を、聖書における父なる神の言葉による創造と同一視し、それが女性の特権である出産能力を奪い、男性を極端に完全な存在にする役割を持っていると論じている (53)。つまり Rochester が Jane を Mrs. Rochester と名付けるとき、彼は St. John と同じく、男性的権威で Jane を所有しようとしているのであり、だからこそ Jane はその名前を聞いて青ざめるのである。
- 7 Tromly, 63. また、Homans が指摘するように、母となることがその女性のアイデンティティを脅かすことであるのなら (91)、主人公 Jane のアイデンティティは小説の最後で一番の危機を迎えることになる。
- 8 例えば、Janet Gezari は、Rochester の負傷した腕が小説の中では左腕と書かれているのに対し、Jane が “I am still his right hand” (475) と描写することは、右

は善であり左は悪であるという、figurative な言葉の使い方だと指摘している (85-88)。

9 多くの批評家が語り手の呼びかけが読者に与える効果について論じてきたが、そのような呼びかけをする理由を論じているものは少ない。Mark Hennelly Jr. は当時の時代状況や Brontë 家の子供たちの習慣からして、小説を読み聞かせる機会が多く、“reader” という頻繁な呼びかけによって読者とテキストの間にダイアローグが作り出されると論じている (Hennelly Jr., 693-694)。また Carla Kaplan は、Jane Eyre の語りを “girl talk” と定義付け、聞いてくれる人を探す Jane の語りは読者を彼女の “confidant” にすると論じている。

10. Carolyn Heilbrun は F. S. Fitzgerald の妻の狂気について、狂気とは語り^{ナラティブ}を奪われたことによる「物語を喪失した状態」であると書いている。Jane Eyre においても、狂女 Bertha の物語は、彼女の狂気とともに、Rochester によってしか読者に伝えられない。Rochester は Bertha の所有を拒否するだけでなく、語りを奪うことによって妻を狂気に陥れ、彼女の存在を無にしてしまうのである。

Works Cited

- Berg, Maggie. *Jane Eyre: Portrait of a Life*. Boston: Twayne Publishers, 1987.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Ed. Margaret Smith. Oxford: Oxford UP, 1993.
- Dale, Peter. “Charlotte Brontë’s ‘Tale Half-Told’: the Disruption of Narrative Structure in *Jane Eyre*.” *The Brontë Sisters: Critical Assessments*. Vol. 3. 324-341.
- Dunn, Richard J., ed. *Jane Eyre*. By Charlotte Brontë. NY: Norton, 1971.
- Eagleton, Terry. *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës*. London and Basingstock: MacMillan, 1975.
- Fromm, Erich. *Love, Sexuality, and Matriarchy: about Gender*. Ed. R. Funk. New York: Fromm International Publishing Corporation, 1997.
- Gezari, Janet. *Charlotte Brontë and Defensive Conduct: The Author and the Body at Risk*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1992.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Women Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven and London: Yale UP, 1979.
- Hardy, Barbara. *The Appropriate Form: An Essay on the Novel*. London: Athlone Pr., 1964.
- Heilbrun, Carolyn. *Writing a Woman’s Life*. NY: Billantine Books, 1989.
- Hennelly, Jr., Mark. “Jane Eyre’s Reading Lesson.” *ELH* 51 (1984): 693-717.

- Homans, Margaret. *Bearing the Word: Language and Female Experience in Nineteenth-Century Women's Writing*. Chicago: the U of Chicago P, 1986.
- Kaplan, Carla. "Girl Talk: *Jane Eyre* and the Romance of Women's Narration." *Novel* 30 (1996): 5-31.
- Marcus, Sharon. "The Profession of the Author: Abstraction, Advertising, and *Jane Eyre*." *PMLA* 110 (1995): 206-219.
- McNees, Eleanor, ed. *The Brontë Sisters: Critical Assessments*. East Sussex: Helm Information Ltd, 1996. 4 vols.
- Monod, Sylvère. "Charlotte Brontë and the Thirty 'Readers' of *Jane Eyre*." *Jane Eyre*. Ed. Richard J. Dunn. 496-507.
- Rigby, Elizabeth. "An Anti-Christian Composition." *Jane Eyre*. Ed. Richard J. Dunn. 449-453.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*. Princeton: Princeton UP, 1977.
- Tromly, Annette. *The Cover of the Mask: The Autobiographers in Charlotte Brontë's Fiction*. Victoria: U of Victoria P, 1982.
- Woolf, Virginia. "*Jane Eyre* and *Wuthering Heights*." *The Brontë Sisters: Critical Assessments*. Vol. 3. 68-72.